

中国残留日本人孤児から学んだこと(第5回)

北朝鮮拉致被害者と中国残留孤児

浅野慎一

※兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ(兵庫県版)』

2018年7月号掲載記事に若干加筆しました。

朝鮮半島の非核化に向け、情勢が大きく変化している。北朝鮮拉致被害者の捜索・帰国にも、新たな局面が開けるかも知れない。

戦後の東西冷戦やそれに基づく国家どうしの対立によって家族が引き裂かれ、何十年間にもわたって離れ離れにされた。この点で、北朝鮮拉致被害者と中国残留孤児はまったく同じである。

日本政府は、「中国残留孤児はやむを得ない戦争被害。北朝鮮拉致被害は平和な時代に『ならず者国家』の北朝鮮が引き起こした許しがたい犯罪。両者はまったく違う」という立場をとっている。日本の多くのマスメディアや世論も、こうした日本政府の立場を大筋において受け入れているように見える。

しかし、この連載記事の読者は、中国残留孤児が決して戦争被害者ではなく、戦後の東西冷戦による被害者だということを既にご存じであろう。残留孤児を生み出したのは、1945年のソ連参戦や日本敗戦ではない。戦後の東西冷戦の下、1958年に日本政府が中国から日本への引揚事業を打ち切った。また1972年に日本政府が、中国にいる残留孤児の日本国籍を一方的に剥奪した。これらの戦後の日本政府の政策のせいで、残留孤児は肉親との再会も、また日本への帰国もできなくなったのである。

中国残留孤児と北朝鮮拉致被害者は、どちらも戦後の東西冷戦やそれに基づく国家どうしの対立によって家族と引き裂かれた被害者だ。ただ、違うのは、主な加害者が北朝鮮政府か、それとも日本政府かである。

1957年、岸信介首相は台湾を訪問して「共産主義が日本に浸透するには、ソ連からよりも中国からの方が恐ろしい」と発言し、台湾国民党の「中国大陸反攻」への支持を表明した。また1958年には長崎市で開かれていた日中友好協会主催の中国品展示会場で、日本人右翼男性が中国国旗（五星紅旗）を引きずり降ろす事件が発生したが、日本の警察は犯人を即日釈放した。中国政府がこれに抗議すると、岸首相は「国交のない中国の五星紅旗は国旗に値しない。中国側の抗議は日本への内政干渉だ」と反論した。そして日本政府は、こうした日中関係の悪化を、かねてより計画していた引揚事業の打ち切りにとって「あまり目立たず自然な形で利用し得る機会」と位置づけた。中国政府は引揚

事業の再開を呼びかけたが、日本政府はこれをも無視した。中国に取り残された「未帰還者」を、帰還不可能な「残留孤児」にしたのは、まさに東西冷戦下の日本政府による中国敵視政策である。

北朝鮮拉致被害者問題は、中国残留孤児が国家賠償訴訟を起こす上でも、一つの大きなきっかけになった。すなわち2002年、小泉首相が国交のない北朝鮮を訪問して拉致被害者の安否を確認し、日本への帰国をごく一部だが実現した。また日本に帰国した拉致被害者に対し、日本語教育・就職・年金・子供(二世)の教育等、生活全般にわたる手厚い支援策を実施した。日本のマスメディアはこれを連日、大々的にとりあげ、小泉首相の人気は高まった。

当時、このニュースに接した残留孤児の思いは、非常に複雑だった。「たしかに北朝鮮による拉致は許せない。被害者の早急な捜索・救出、及び、日本への帰国後の生活を支える公的支援も不可欠だ。でも、拉致被害者と残留孤児の取り扱いはあまりに不公平ではないか。日本政府は、日中国交が正常化した後ですら、中国に残留孤児の捜索・安否確認に来ようとしなかった。それどころか、残留孤児の日本国籍を一方的に剥奪し、日本に帰国できないようにした。ようやく日本に帰国しても、日本語教育・就職・年金等の公的支援は極めて貧弱で、やむなく生活保護を受給すると『怠け者。甘えている。努力が足りない』と非難された。子供(二世)と一緒に日本に連れて帰ることすら厳しく制限され、家族は再び引き裂かれてしまった。そして何より、拉致被害を生み出したのは北朝鮮政府だが、残留孤児の被害を生み出したのは日本政府ではないか。本来、日本政府は北朝鮮拉致被害者以上に、残留孤児にこそ手厚い補償・公的支援をするのが当然だ」。こうした不公平・理不尽に憤りを抑えきれず、残留孤児たちは2003年に国家賠償訴訟に立ち上がったのである。

ただし今現在もまだ、残留孤児に対しては、北朝鮮拉致被害者並みの公的支援は実施されていない。

最後に、対米従属・東西冷戦の枠組みに固執する日本政府の政治姿勢は、北朝鮮拉致被害者の捜索・帰国促進にも悪い影響を与えているように思う。安倍首相には、祖父である岸信介首相の過ちを二度と繰り返すことなく、平和な東アジアの構築に向けたイニシアティブを発揮してほしいものだ。それは、北朝鮮拉致被害者と中国残留孤児の共通の願いであろう。